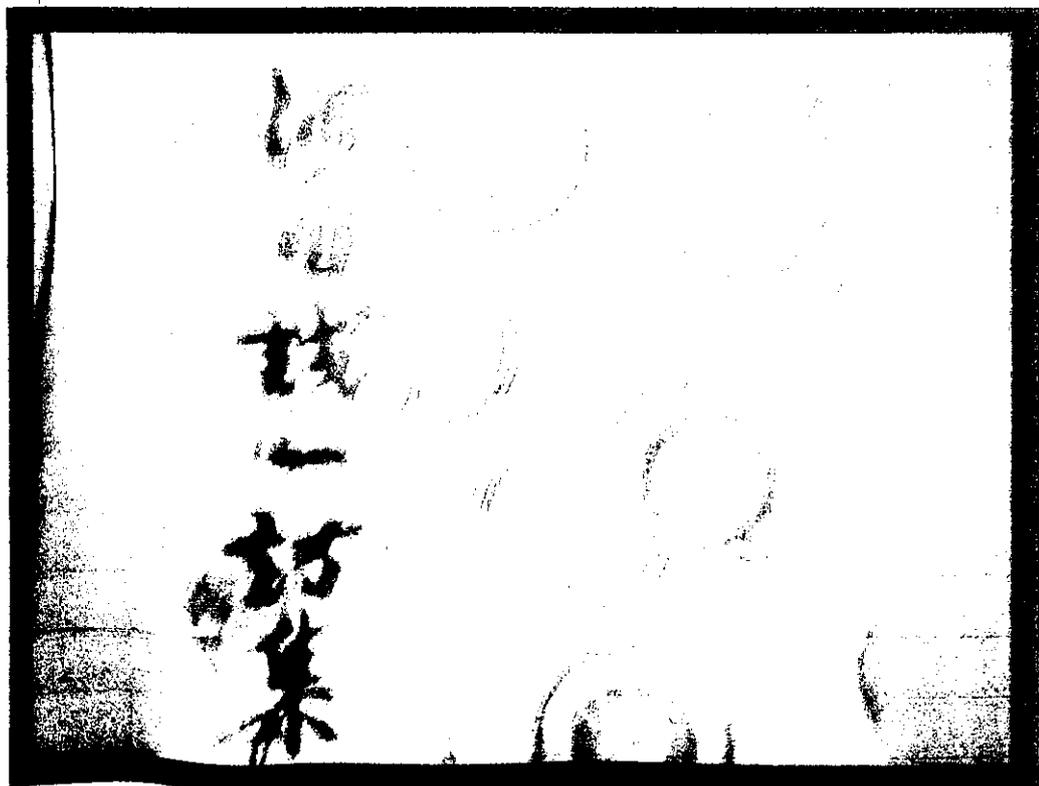


仁尾出身 昭和初期の詩人

河田誠一資料

1940年9月30日、森谷均の昭森社より  
『河田誠一詩集』が刊行された。(時  
価 50万円) 装幀は草野心平。田村泰  
次郎の「河田誠一の詩」と井上友一郎  
の跋文「河田誠一と私」



# 河田誠一年譜

- 明治 4 4 年 1 1 月 2 3 日 香川県三豊郡仁尾町中津賀、河田武治・マスノの次男として生まれる。
- 大正 7 7 年 4 月 仁尾小学校入学
- 大正 1 3 年 4 月 香川県立三豊中学校入学（バス通学）  
文学を愛好、同人誌「愛誦」に投稿、「四國文學」「オーロラ」主宰  
校友会誌「巨鱸」生徒文苑に多くの作品を取り上げられる。
- 昭和 4 4 年 4 月 早稲田第二高等学院文科に入学（中野区江古田に下宿）  
同窓の田村泰次郎らと同人誌「東京派」創刊、「今日の文学」「青猫」に参加
- 昭和 5 5 年 同校退学、従妹清子と同様、創作を続ける。
- 昭和 8 8 年 5 月 同人誌「櫻」を坂口安吾、井上友一郎、田村泰次郎、北原武夫、菱山修三と創刊  
夏頃から結核を患い帰郷、高松日赤病院で療養
- 昭和 9 9 年 2 月 3 日 高松市塩上町仮寓に死去（行年二十四歳）  
2 月 5 日 仁尾町自宅にて葬儀（戒名、誠山道一居士）菩提寺は町内常德寺  
2 月 1 1 日 東京から親友田村泰次郎、河田家に墓参に来る。
- 昭和 1 5 年 9 月 3 0 日 七周忌を記念して『河田誠一詩集』（草野心平装幀）昭森社より刊行



河田誠一 かわたせいいち 一九一一年(明治44)〜一九三四(昭和9)。詩人、小説家。

三豊郡仁尾村中津賀(現仁尾町中津賀)生まれ。三豊中学校から第二早稲田高等学院文科入学。一九三〇年(昭和5)中退。中学時代「四国文学」(同人雑誌)を創刊。上京後、田村泰次郎、井上友一郎、坂口安吾、矢口津世子、十返室らと交わり、『愛誦』、『新科学的』、『芸道途』、『東京派』、『今日の文学』、『桜』などの文芸雑誌、同人誌に詩、小説、評論を発表。その才能が認められていた。同人誌『桜』の第五号は「河田誠一追悼号」を特集、多くの追悼文が掲載されている。一九四〇年(昭和15)草野心平装丁・編集で「〇〇部限定の『河田誠一詩集』」が刊行された。↓同人雑誌『近石春秋』

昭和六年

作品名	種別	発表誌	月
石川啄木論	評論	愛誦	1
流木	詩	愛誦	1
海豚の花	創作	東京派	2
石川啄木論2	評論	愛誦	2
妻を捨てる日	創作	大阪化粧品商報	2
早春	詩	新月	2
マルタの想苑 (ナ・リイヴス)	翻訳	東行	1号
インド・ブレハの夏	創作	東京派	3号
花と金鉞	創作	今日の文学	4
横光利一序説 [AMAZON]	評論	東京派	4号
椿	創作	愛誦	4
アラビヤ夜話	創作	愛誦	5
伝説 (ユージン・ジオラス)	詩	愛誦	6
野獣	訳詩	東京派	5号
新進作家の作品	創作	東京派	9
白色病院	評論	今日の文学	9
スマイルン	詩	愛誦	10
谷崎潤一郎	創作	東京派	10
	評論	新科学的	12号

昭和七年

緞帳	創作	青猫	1
井上友一郎	評論	今日の文学	2
海薔薇	創作	ヌウベル	6
「矛と盾」など	評論	今日の文学	11

昭和八年

人魚に惚れる	創作	モダン日本	2
海辺の話	創作	時事新報	3
真夏の蘭	創作	桜	1号
古見の男の話	創作	?	?
無花果	随筆	桜	2号

三中校友会誌「巨龍」第二十二号（大正15年12月刊）

夢が血の歌（短歌）

三ノ三 河田 誠 一

- 高らかに奏づる唄ぞ夢が血は  
青き焰に燃えにけるかも
- たゞ永き水の流れのひとゝきの  
心痛くも秋は澄みたり
- 行手さへしれずさまよふ白雲の  
西日をうけし心やいかに
- 木犀の花はあらくこの年は  
一枝折りて葉のみかざり
- 漁火二つ遠方に見るのどけさよ  
ひなびの秋の汀邊にして
- 夢秘むる秋海棠の咲き亂る  
朝の海の岸邊さわがし
- 青巖に逆まく波よ寂寥の  
安きひと日もあらねばやわれ
- 秋更けて日とて深きを我は知る  
たゞ思はるゝ山の色哉
- しみとくど便り書かむと思ひ立ち  
晴れたる空を見ればやめつも
- 満ち湛ふ潮のすめる淡緑の  
色冷くも空と身に泌む
- 家事にとて學を休みし此朝餉  
近くぞ見ゆる鳥影を見ぬ
- わが胸はゆくりなくすみ日向行く  
白き鋪道に笑む人を見つ
- 野分とて未だ早くあらむされど  
風の吹きて冷き秋半去る
- 心なく瑪瑙の玉の冷たさの  
秋晴空に小雲みしころ
- 秋虫に潮黒すみ風冷えて  
青葉朽葉に落つる夏夢
- 松茸のしるこを飲みし酔はうてふ  
人の言聞く秋闌けし日なり
- ぐみどりし昔思出づ裏山に  
汚き子らを見るたびわれは
- おほげらく紺青色に冷きも  
たゞあゝぬるき陽光を持つ朝よ

○峠路に暮れてかなしも虫音きく

遙けく白き道を上りぬ

○沖白き今日の空とて日暮るころ

たゞ血を流す色に消えしぞ

(一九二六、十一、四)

短歌會

今年の暑中休服に内山教諭が主となつて三年生の有志だけで短歌會を開催した。

處が投稿家三十一名、歌數百四十一首といふ意外の盛況を呈したので其中から比較的面白さうなものを次に掲載してみよう。

河田誠一吟

○閑なる野川に賤の男馬洗ふ

水音ひやく眞夏ゆく午後

○何となくかなしき日なり我はたゞ

初夏の空ながめてありき

○父の無き家は悲しも母はたゞ

小言いひつゝ水場に泣けり

○夕炊ぎ獨せし我弟と

留守居の飯のこげしを食へり

○水近き青草の上たどり踏む

小羊の群靜かに泣きぬ

○砂にねて今宵も青む月を見ぬ

我さめくくと泣きし夕よ

○鐘樓を出て夕の空見つゝ

風に吹かれて石段下りぬ

○我は獨机によりて汗ふきぬ

叱りし弟に心にわびて

○山鼻に只一つともる故郷の

かなしき灯影今宵も見えし

○南海の夜の潮のかげ黒し

沖の孤燈にともしびは泣く

○春の朝げ小犬伴れゆく乙女あり

森の小徑を我さまよへば

# 徒歩部記事

## 故郷平石に遊ぶ

三ノ三 河田 誠 一

一、長江曲浦海青く、山嶽なる仁尾の郷、  
稲田は深く耕され、鹽田は遠く擴りて、  
勢充てり誰が家も。

二、沖つ波間の平石を、堅き心の友として

老も若きもなりはひに、いそしみ交はし睦じく、  
暮すも樂しこの郷に。

三、聳ぶ鶴島嶼島の、松より松に吹く風も、

千代萬代の聲あげて、我が浦里の海幸を

今日も祝ふか懸灘。

三方山に圍まれ一方海に面した仁尾の町には平和な町歌が、夢の様に先輩の師、堀澤氏によつて歌ひ初められた。

幼時から今日まで、私は幾度あの平石に遊んだことであつたらう。

寒い冬の月も雪も消えて長閑な春が來ると、物靜かな油の海をすべつて海岸から約十三町許り離れた平石附近を遊ぶ客はおびたゞしい。そんな頃私がよく鹽田の堤防を根氣よく傳つて西の方に向くと、赤いバラソルの船や酔ひしれた人々の船が毎日五六隻以下を見たことがない。その頃の海は油のやうにとろ／＼として、あた／＼かい春風が鹽田の中に動く女人夫の姉さんかむりをなで、沿岸の柳の木に消えるやうだ。長閑な船頭の舟唄が夢のやうに遠く耳に傳はると、私は只さへうつとりして海の青壁を見てゐるのに、思はず堤防の草の上に寝ころんで眠りたい氣がする。

舟を堤防につけて、私らは船に乗るやうな氣持で前方の鶴島と龜島を見入る。鶴島は大葛島、龜島は小葛島と人は云ふ。大葛と小葛の間から、青く霞んだ伊吹島が、はるかに見ゆると、南の方には靜かな……靜かな春の夢のやうな海の果に伊豫の突出た陸が見え、そのこちらに九十九山が三角の揺り辨當のやうにきちんと坐つてゐる。それと東か

らわずかに續いた秩父峠の山の間に、懐かしい友の居る宿本の人家があることがわかる。同時にふと思ひ出すのは峠を越えて學校から歸る雨らがりの日、クツキリと上る四阪島の黒煙である。

驟を北に向けると、又山である。突出た山の端は淡く霞んで見えぬ。たゞそこに又三角形の九十九山位の島が見ゆる。その突出た三崎と大葛との間にはたゞ水平線の彼方がない。水平線がない。遅い汽船が時折規則的な響をのこして過ぎて行く。

X

鹽田の堤防の眞直な白煙を見、人夫の男女の徒然をなぐさめる聲もいつか止んで、たゞのんびりした空氣を心行くばかり吸うて海に出ると、右手に舷近くある洲續きの岩石の島は天神様と人が云ふ。青い松が生ひ繁つて、石段續きの上へ上つて行く。秋とか初冬とか少し平石へ行き難い季節は、人は多くこの小な島へ遊びに來る。

平石は幾度行つてもあきない。よく遊客がこの附近で釣をして魚籠に澤山のささみやますなどを入れてゐるのを見る。私は幼い時、幼友達親類の人や、兄や、父や母やと平石に遊んだことが幾度あつたかしのれないけれど、小さい時の記憶は、あの白いまつしろい石が平石だ……平石のあの石の中にはきつと美しい女神が住つて居られるのだ。そして夜が來るとお灯をお掛けになつて出られるのだ。そんなことを考へては毎夜のやうに海邊に出て、その頃まだ出來ておなかつた今鹽田になつてあるところの干潟に光る夜光虫を見ては、平石の附近の、大葛島の附近の漁火を見たのであつた。

X

五月十六日の朝早く私等仁尾三中學友會は十數名、平石へ來る百數十名の同窓を迎へる可く、朝まだ早く、干潟を歩んで、天神様の岩石の奇岩を踏んで、ツル／＼する足を支へ乍ら船に乗つた。二十許りの茶瓶や澤山の湯呑みや菓子やラムネや其他いろ／＼な準備物を危うそうに船に積込むと、船頭はやがて船を動かした。五月の朝の潮は靜かだ。ザブリ、／＼、キイ、／＼、艦の音が悠長に響くと、船はやがて廣い海に出た。小さく平石の影が大葛の右に北に見える。春の朝

風が何時か生温くなつたと思ふと、日が柔い光線を海面一帯に投げて来た。九十九山は南方にかすむのである。空はあくまで晴れてゐる。鹽田の堤防が後方に長く横はつてゐる。天神像を繰返へる。庄内村のある北方の突出た山がハツキリして清らかな朝の潮が白い。只一縷に白い。そして舷から手を出して潮に入れる。

底が青い。氣分がハツキリする。

氣が抜けたやうに、形容のしやうがない程、壯快な氣分だ。海、潮、山、島、岩、舟、すべてが美しい色彩に彩られるのである。

皆は、さゝめき會つた。それは純真な、平和な、若い者の心からの笑ひだつた。朝の潮がだん／＼と音味を増して行く。

舟の進むにつれて、一同は黙つた。皆の間は、たゞこの海の美、純然たる海の色、さわやかな氣分によつて心がとろ／＼と解け合つた。舟の途々釣をする舟を幾つも見た。

平石に遊んだ人は第一にこの春の海の氣に恍惚とさせられるものである。平石の美は往き歸りのこの海の美と、葛島の奇岩と綠陰と、白砂と、それらのすべてを語る島廻りと、大きい廣い白い平石に上つた時の心持と、附近の渺々とした海とにあるのだと私は思つた。

船をすて、私は白い可成り廣い砂を踏んで松や其他名知らぬ澤山の木の生ひしげつた中に入り二尺巾の急な坂を上つて行つた。頂上へ着くと今度は下り坂だ。下り着くと、ここに一軒家があり、きたない二人の子供が島の草を取つてゐた。その家に着くと廣い海が見え過ぎる程見えて、もう長閑な春の氣分が襲つて體がだるい。

澤山の薪を背負つてボロ／＼の着物を着た四十近く見える女が歸つて来たところであつた。私等は乞うてそこで湯を沸した。三人が火を焚いて、他は皆木々や茅をかきわけて薪を拾ひに行つた。氣が遠くなつた。

「来たぞッ」皆は飛ぶやうに集つて来た。私はとまの上に立つた。皆も立つた。帽子を振つた。万歳と云つた。次第に船が近づいて来た船が一しよになつた時、私等の船が見へ出て澤山の同窓の船を曳いた奇岩―怒角をなした岩が出入りしてその美しさは形容のしようがないやがて舟は平石に着いた。私等は、四圍の氣分、風景に壓せられて口が開かなかつた。

わざ／＼来た友の顔を一々見た。「皆はどう思つたらうか？」誇らしい氣分が、唯かを責めさせたいと思つた。が私等は皆黙つてゐた。

大葛の北麓半町の距離にある平石は永久に助きそうにはない。東西九間南北七間面積は六十餘坪だ。平坦な岩上は、數百人を坐せしめることか出来る。南の方が低くなつて、舟をすて、上るのに便利である。

大葛の岩近く大石が見ゆる。本當に犬の通りである。少し前に四五年前に壹尺五寸程あつた尾が五寸許り折れたが、そんな事は關係ない私等はこの天然の大岩石が水中に平たく出てゐる上であちらへ走り此方へ飛びしてゐる。やがて私等は別に準備のために先に大葛の宮ヶ浦に引返した。そして出来る限り早く準備した。

澤山の湯が準備せられた。聞もなく船が歸つて友が上つて来た。

お近頃いので食事になつた。

各自は島のすべてを征服した。島の頂上から私等の来た海面を見た。鹽田の煙がどげなく上つて行く。小さな人夫が見える。青い海の疊の上に、釣／＼舟が見える。

小葛の前方にずつと細長い洲が曲りくねつて、潮をすかして見ゆる。白いかもめが十羽程水をく／＼／＼してゐるのが一際目立つた。四圍皆長閑だ。

いづこともなく長閑な舟唄がきこへて来た。

時間がたつた。一日を楽しくすごした私等は、午後四時頃だつたと思ふ。又舟にのつて歸つていつた。

可成りの努力を惜まなかつた仁尾校友會は、生徒や先生方が満足して歸られたであらうことを想像し、少からず任を果した幸福を感じた。惜しかつたのは奇岩怒立し起伏し白砂を洗ふ波に美しい島廻りをする時間がなかつた事であつた。――完――

奇岩—怒角をなした岩が出入りしてその美しさは形容のしようがない  
 やがて舟は平石に着いた。私等は、四圍の氣分、風景に壓せられて口  
 が開かなかつた。

## 巨龍第二十三號目次

### ◇文苑

一年	大久保、秋山、大石、楳	毛
二年	安藤、田中、香川、徳丸	完
三年	押川、大森、加藤、森、秋山、三野、合田 片山、山崎	豊
四年	田中、山川、河田、押川、山岡、大野 吉久、上森	音
五年	三野、本田、成行、宮武、野田、近藤、 竹原、岡部	森

### 驢馬のほひ

四年 河田 誠 一

遙かなる南の國に生れ來し鳥こゝにゐてほろほろ啼く秋  
 鳴きさやぐ驢馬のほひにちからなきうれひの淵に秋雨の降る

わがどちは暮春の窓にかなしみの白磁こわして日ごと唄ふも  
 青臘の灯かげの思ひ果敢なしやそのかみの春の樂しきどちよ

水のごと澄む月まるく火の山に詩人の嘆く森林のあり

枇杷の實のをゆびに残る皮の香に悔を覺えしはつなつの朝  
 木犀の匂ふはかなし秋晚く海鳥の音のひびく海邊に  
 秋雨にしどみとる峽しづもりて母病むあしたうれひしげしも

### 詩三篇

#### 1 高原の息

高原の冬に、

自轉車の小僧が馬のやうに白い息を吐き

兵隊さんの齒がガツガツ氷る朝

星のカチ合ふ音を 僕は流のせくらぎに聞いた

そして霧の晴れたあとに

山鳥は驢馬に乗つた旅人の頭上に啼き

麥を蒔いた黒土に淡い影を落した。

#### 2 日本の笛

透明な空気を吸ふことに

水銀の滴りに似た寒い月かげに

それらを夢に見ることに詩にすることに

本當を言へばぼくは倦きたのだ。

山かげの暗い村は一そうさびれて

ぼくの故郷であるその里の森林に

狭霧のなかの赤い灯の憂愁のうるみに

見知らぬ妹が病んでほぬのか！

月は魔のやうに場末の草葺き屋根に躍り狂つてゐる……

それなのにああ！

なんとそのひかりの冷たいだらう……

夜ふけの湖の静けさは

小魚も影を食べるのを止めたのか……

うれひは……しんしんと水泡となつて浮上り、あゝ夢をな

くした小魚の嘆きは、誰の小舟にまつはるのだらう……

何故か僕は日本の笛が吹きたくて

裏の果樹園にしのび入つて緑色の眼鏡をかけ、薄い光に

落葉と蟲のさゝやきをかなしんだ。

### 3 去年の落葉

あはれ冷き晩春の石だたみに

去年の落葉……

朽ちず、朽ちず。わが若き思ひに。

## 四年 河田 誠 一

一、月の出づる程曙の空おぼえて横雲のたなびきたるに、やゝ  
匂ひ初めたれど遠山の梢にいさよひて顔も見せず。辛うじて  
さしのぼりたがるいつしか待居顔に棚引きたる雲に入りぬる  
ぞいとつらき。(花月草紙)

曙の空おぼえて一夜明方の空に似て。

匂ひ初めたれど一月光が少し明るく照り初めたけれども、

いさようて一ぐずぐずしてゐて、ためらつてゐて。(進まん

として進まず止まらんとしたためらふ。)

いとつらき一変情ない。

月がさし上る頃は丁度明方の空に似てゐて、横雲がたなびい  
てゐるところに少しほの明るく光が照り初めたけれど、まだ  
遠山の梢のあたりにぐずぐずしてゐて月の姿も見せない。そ  
れがやつと上つて來たが、いつの間にか待設けてゐるやうな  
様子をして棚引いてゐる雲の中に入つてしまつたのは誠にな  
さげなくつらい。

### 二、目あき千人目くら千人

大勢の人々の中には物事のわかる人も澤山あるが、物事のわ  
からぬ人も澤山ある。

# 巨龍

御即位御創立  
大御立  
奉典  
祝奉  
紀念  
號

昭和四年三月發行

## 巨龍記念號

三年 綿丸、藤原、小林、筒井……………六  
四年 大村、葛原、横尾……………七  
五年 田中、大喜多、大野、河田……………七

## 秋 思

五年 河田 誠 一

山の色が紫がよつて紺碧の空と區切り、秋の模様を彩ると、  
秋草の上に白い風が流れて地上の萬物を浸し、海草のやうにな  
びく杜の灌木林のほとりの小堀などには、もう小魚たちが冷い

音をたてながら、水面の晝の月を喰べてゐるに違ひない。その頃私の心は澄み、かじかんだ憂鬱さへわくのくに、一しんに頭上を白い雲が走り、ほろ苦い陶酔のさなかに、私は蛙のやうにぼつねんと空を見あげかすかなため息をさへつく。

私は、たつた二とせの短い秋のめぐりに、ユスモスを愛し、月夜の茶園にしのび入つて名しらぬ虫けらをいつくしみ、馬追ひのゐる白い小徑を散歩することを覚えた。

「わたくしは生きて居たのだ」としみじみそう考へる黄昏の毎日の散歩。遠い日のことのように覚えてゐる―ある晴れた春淺い渚に透明な海月が敷しれず打あげられてゐたが、私はその一つ一つを握りつぶしながら渚をたつて行つたことを。私はそのとき海月のあまりに透明なことを悲しんだ。又それでいいのだとも考へた。

X

静かな静かな生活―それを私は現實に享樂しつつも、或種の寂寥に似たものをすら感じてゐるのはどうした事だらう。しみじみした黙思に耽るのも決して若すぎる私のみではあるまい。丁度朝露がしつとり置くのは草のみでないやうに。

祭が来る私は蚕のやうにうづくまつて、じつとそれを待つてゐる。私はそれが来たとき黙々として人中に押されてゆく私を想像する。私は人が騒げば騒ぐほど黙つて悲しそうに歩んで行く。そして祭のあとの寂寥をもちあつかふやうなことはなく、それをじつと抱きしめるのが好きな私を見出す。

そんな日の晴れた草の上にぬるい日射しが擴り、こうこうと鳴る秋風に吹かれる青空のやうな冷たさの草いきれ——あゝ、秋は人の世のまことなりと、かつて吾が師は教へぬ。吾いまは知る。秋はひとの世のまことなりと。」秋草をわたるかぜは私のおもひを遠いところに送り、またはるばる戻つて来る。

祭、それを私はじつと見つめるのが好きだ。しつとりと露の置く澄み切つた空のもと、今宵もまたあの灯が一つともる山かけを、月光にぬれながら白い葬列がぬつてゆくかもしれない。さんざめき。さんざめき。お宮の燈に、雑沓が見えるやうだ。けれども私はそこへ彷徨ひ出るよりもこの窓のもとで、其の宵は小さな妹のかへりを待たう。

X

秋の草に蜻蛉がとぶ。青いくるくるした目とんぼが、ついついとまざる枯草。とんぼよ。とんぼよ。軽い翅のとんぼよ。

吹かれてゆく。吹かれてゆく。とんぼのやうに。吹かれてゆく私。

風。風、風、秋のさびしい訪問者。かぜよ。

白い小さい月の船の泛く空の海の深さに、情慄の、風を飛ばさう。

ろんろんと脳裏に刻むリズム。そして國々と流れるまつしろの雲。

あゝそれは、

あやかな澄心を透かして流れる蒼空の潮流。

日射は淡く山頂にまぐねしうむを焚き、

コケツトの少女は一心にうたふ。

あゝ、秋のさびしい訪問者は、

しろがねの笛を吹きすまし、悲しい、黙想をころがし花々のうれひをとばし、季節の痛ましい、配列をよぎる。

X

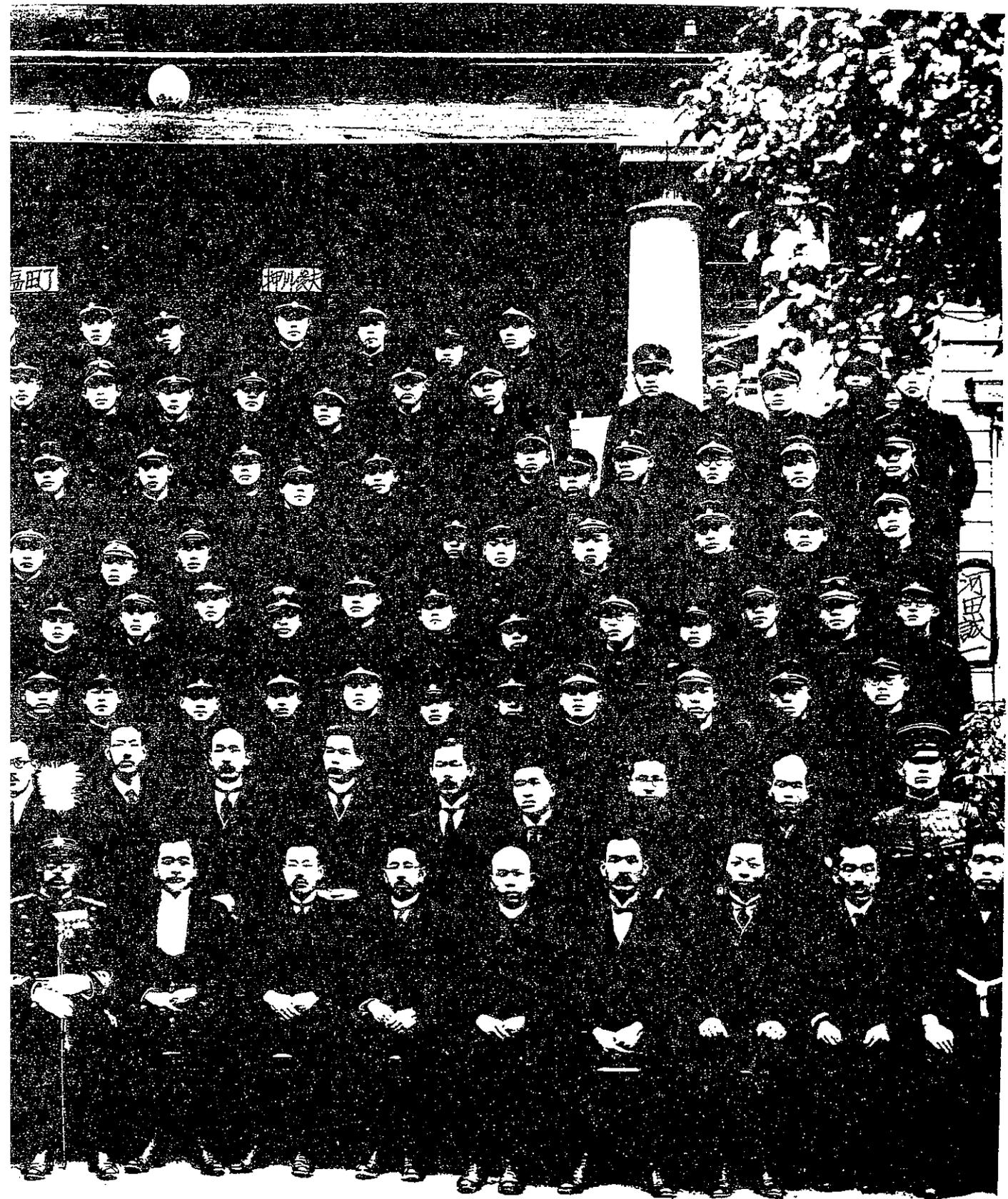
丘に小供達が草笛を吹いた。澄んだ少年の瞳に憧憬の色を漂はせて白いちぎれ雲が流れた日である。ふけた秋の空のもとに沈みはてた私の心は、あの谷向ふをゆく黒い汽車の置きわすれたけむりのやうにはかなかつた。

X

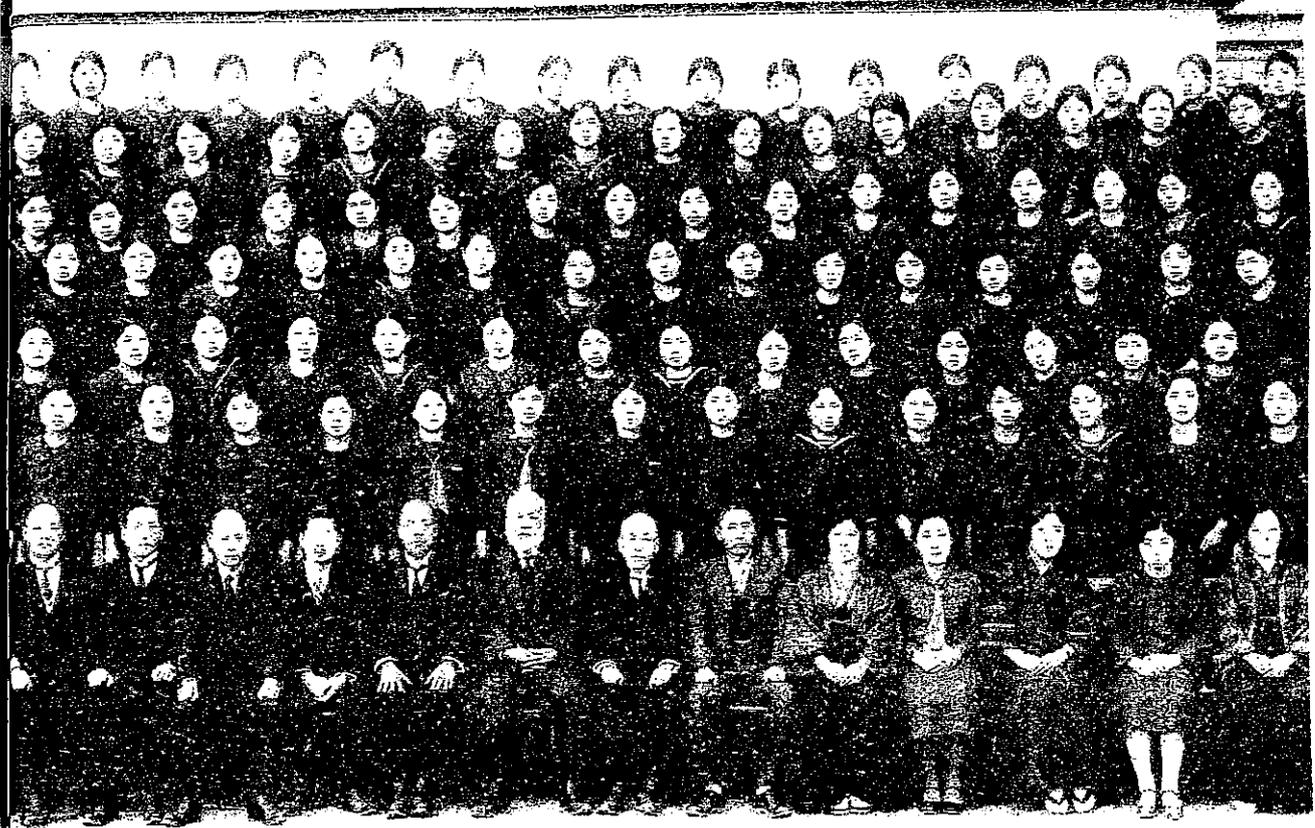
私は私の遠く、淡く、寒い太陽を感じる。

こいともぎる杜草。とんぼよ。とんぼよ。軽い趣のとんぼよ。  
吹かれてゆく。吹かれてゆく。とんぼのやうに。吹かれてゆ  
く私。

私は私の遠く、淡く、寒い太陽を感じる。



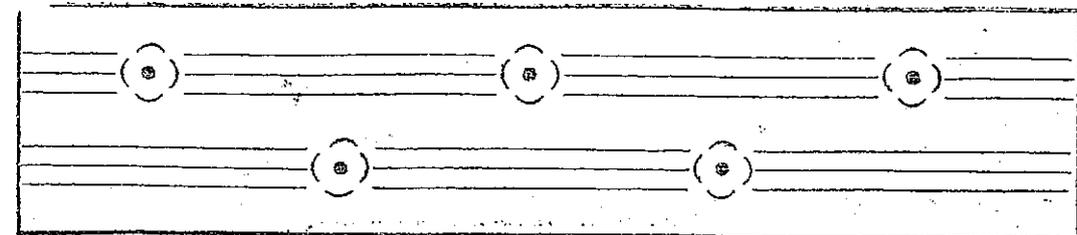
三中第25回（昭和4年3月）卒業生



三女第23回(昭和6年3月)



# 四國文學第二卷第五號目次



詩	文 散	篇六作創	評論
春の魂へ……………橋本吾	心 <small>の</small> よる……………毛利芙蓉子	蛙……………芳地俊夫	明日の藝術……………新出與作
胡蝶の最後……………英香都子	如月の幻影……………青野影二	寂寥……………谷口星水	戀を求むるもの……………沙々波曉太
春に憧憬れつ……………岸和夫	戀でせうか……………河上春郎	病める人々……………芹田木千路	船内 <small>の</small> 彼……………南條稔
風呂敷包み……………小野芳子	青緑の間に微笑む黎明の神……………谷虹二	團樂……………水谷博	早 <small>春</small> ……………河田誠一
低唱……………草藤玲子	散步中の出来事……………淺田正男	春旅 <small>の</small> 宿……………砂山賢一	死……………渡邊まさ子
	新陽止観……………那家辻一	春旅……………那家辻一	



編輯後記

◎鷗島の詩人を降参せしむた春も爛になつて来た櫻花もいつの間にか散つて。葉櫻となりかけてゐる。生れ出た若葉は若人の血潮を躍らしてゐる。そこにある力を吾々は見出し得る。今私は編輯し終つて奮みると、自らの技量の乏しさを恥ぢないではゐられない。体裁や其他の點にも缺點はありませう。けれども生れ出た若葉の様に、一段々と充實し、光彩を放つ様になることを信じて疑はない。諒とせられよ。

◎日敵が切迫し、發行が豫定より遅れたため餘計に苦心しました。だが凡んど全國にわたつて御寄稿を得たことは何よりも力強いこととす。殊に詩欄は賑はすことが出来ました。岸氏の詩は私への書信中にあつたのですが、一人で讀むのが惜しく思はれたので掲載することにした。軍々謝す。尙岸氏の戯曲は發念乍ら紙面の都合上次號に掲載する事に致しました感からず。新出君のは締切後に着いたのだが都合してのせることにした。

◎一たん放たれた矢が行く所まで行く様に、歩み出した道には如何なる迫害があつても歩み續け、そして理想の域に達する考へである、だから誌友諸兄弟が益々奮勵せられ勸誘せられてどくし佳作を御投稿して下さい。ことを望むので

ある、御投資者が多くなれば、従つて頁數が擴張し、内容が充實して来る譯だから——  
◎私は大なる抱負を以て生れ出た四國文學のために諸兄弟の若々しい血潮を吸入し、すく／＼と成長せしめ、意義あるものにしたのである  
◎創刊號を編輯し終つて、いさゝか希望をのべ讀者の健康と御力添を願つて筆を擱く。  
(附條記)

◎とう／＼本號が出来たが、これ迄の努力は讀者諸兄弟の御推察を乞ふ。

◎思ひ切つて一千部刷つた。うれても賣れなくとも、バラまくつもりだ。内容の充實味は號を追ふて益々進める筈だ。本誌がよくなるのは同人の責任も可なり多いが、とりわけて誌友諸兄弟の御後援によるものが多い。寄稿家諸氏がいゝ作を寄せられたら、それ丈向上するのだから、振つていゝ作品が欲しい。

◎右のべたやうにこの雜論はどうのと云ふ前に好意があるならば種々の御注意なり、希望なりが寄せられたい。重ねて云ふが宜い作なら、何でものせるから振つて御寄稿をおねがひする。

◎南國に生れた四國文學——號を追つて大きくせねばおかないつもり。一號や二號でチヨツクラチヨイとへたばらぬつもりだから十二分の御安心を願ふ。

◎創作、戯曲、散文を寄せられるとき、成可く

四六

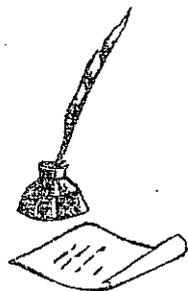
自信あるものを送つて下さい。自信あるものには成可く捺印して欲しい。それ丈自信があれば無條件でのせる事とする。

◎初めて生れたのだからいらぬ悪口を云ふなら、それ丈同情していゝ原稿なり、お言葉を下さい。くれ／＼もお願ひします。

◎支那創設希望が澤山ありますので清規をのせてあるつもりです。成可く誌友なり支那誌友になつて下さい。誌友の多い程こちらは力強いのでから。

◎四國文學もやがて四國文壇を背負ふ必備機關であらうことを同人は確信して進む。

この後記をよむ人よ！四國の人だつたら、大かたはなつかしい名だと思ふだらう。されば振はうてはないか、諸兄弟自身のものとして。送金は小爲替を用ひてほしい。(河田)



<p>定價</p> <p>一部 廿五錢 (送料二錢)  三月分 七拾錢 (送料共)  六月分 壹圓四拾錢 (送料共)</p> <p>誌代は前金の專、送金は小爲替とす  廣告は本社へ直接問合せの事。</p>	<p>昭和二年五月十日印刷納本 (六月号)  昭和二年五月十五日發行</p>	<p>編輯兼發行者 香川縣觀音寺町柳町甲三〇二番  物部覺平</p>	<p>印刷人 香川縣善通寺町  森佐雄祐</p>	<p>印刷所 香川縣善通寺町  株式會社 兵林館印刷所</p>	<p>發行所 香川縣仁尾町中津賀  四國文學社</p>	<p>大賣場所</p> <p>香川縣觀音寺町柳町  物部書店</p> <p>送金は一切本社宛</p>
--	--	--	------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------	--

田村泰次郎「天才河田誠一を悼む」

編者註・この文章は、昭和九年、河田誠一の死の直後、親友だった田村泰次郎によって書かれた追悼文である。(1)は「今日の文学」に掲載のもの。(2)は「桜」―河田誠一追悼号に掲載のもの。「天才河田誠一を悼む」は(1)の表題、(2)の表題は「友よやすらかに眠れ―わが悲しき旅日記」である。

1

私の親友河田誠一は、この二月三日午後四時、香川県高松市郊外の田圃の中の一軒家で死んだ。

大体、彼の故郷は同じ香川県の、メット南の方の仁尾といふ町であるが、昨年十月発病以来、この一月二十七日退院するまで、彼は高松市の赤十字病院にゐた。この退院といふのが、全快した上でのものでないことは無論であるが、それにしても退院して一週間立つか立たない間に、一切の終局が来てしまつたのである。二十四年間の短生涯であつた。

この二日の日に、私が井上(編者註・井上友一郎)の家へ急用で行くと、恰度河田の病氣の看護をしてゐる人から久し振りに便りが来たときで、その文面には、河田が、一月三日咯血したと、それからといふもの早くも覚悟を決めたものか、どうせ死ぬなら東京で死にたいといひつゞけ、果てはこの頃では、少し神経衰弱の気味もあるとのことが、認めてあつた。私はその夜遅くまで話し込んで、そのまゝ井上宅に泊り、翌日も起きてから午後の五時頃までゐた。私達が河田のことを心配して一番多く話し合つてゐた四時頃が、いまだにして思へば恰も彼が最後の息を引取りつゝあつた時刻である。

私と河田との交友は、昭和四年の春、私も彼も早稲田高等学院の共に新入生となつたとき以来である。その当時の思ひ出はいつかもつと著書いて考へるときがあると思ふが、そのとき以来「東京派」から現在の「京派」に至るまで、雑誌の上では無二の仲間でも、芸術の上では彼は私にとつて絶えず恐しい競争相手であつた。そしてこの相手は素に底知れぬ、実力のある相手であつた。

彼の文学が、南方の風景、風俗、人情を描いて瑰麗多彩を極め、一個独自の境地を創出したのは、疑ひもなく、彼の破天荒な天才のためであると思ふべきであらう。彼のあの豊饒無比な感覺、強烈にして純一なる熱情の世界、また滄桑の世界、これら天賦の才は、小説家としては若き彼にとつて尚なすべき多くのものを残しながら、つねに察然としてそれらのものから私達の眼を眩惑し、そして内に於いては益々彼を大いなる成長へと導きつゝあつた。事実は、一月の四月か、五月に私が本誌に「河田誠一」なる一文を寄せて以来の彼の今日の成長に徴して見ても、彼のこれからの成長、飛躍は計り知るべからざる程があるのだ。この一事は、誰よりもよく自らの長所と短所を知つてゐた彼にとつて、それこそ千萬年過さずも断つて消えることのない恨みであるに違ひない。

彼の人間として立派さ、気高さ、面白さ、味の深さ等については、幾ら語つても厭きないだらう。そしてまたこんな匆卒の間に不用意に語り出すには、それはあまりに高く、遠く、遙かな位置にある。彼の友達への友情、それは友達への透徹した、寛容な理解と友達への親身な配慮となつて現れた。彼はつねに私の病弱の癖に放縱で不節制な生活をしてこつたから心配し、私の注意を喚起してくれた。彼は、ともすれば悪徳に爛れようとする私の生活態度に、絶えず清濁で生一本な、高貴な光を注ぐ私にとつて最も身近な、二つとない恩であつた。いまだその恩は、永遠にその光りを消したのである。

私が、去年の九月早々、田舎から東京へ新井薬師の彼の家を訪れたとき、彼は盲腸炎だといつて、ヤすんでゐた。土産に持つて帰つた、滋賀県伊吹山のクワツワ虫の雄雌を持つて行つてやつと、病床から乗り出して、その勇壮な声に聴き惚れた。その聲がいまでも鮮やかに眼元にもよつくと、清らかなる。翌日も私は訪ねた。そしてそれが、最後となつた。

女にとつて真の恋は一生一度だといふ。それは信じてゐるのに驚い私はたゞあるが、一人の男にとつて、真の親友はその生涯に於いて恐らく三指を屈するほども廻り逢はなかつたと思ふ。河田は私のさういふ親友の白眉なのである。

河田が三日に死んで、彼の遺族から私達へ知らせたのが六日の、それも夕方である。これはもしかして私達が四回まで葬式に参列したくも知れなかつたといふことを考へて、故意に遺稿を送りせたと推察されるが、如何にも謙讓であつた河田の遺族らしい処置である。併し私達としては、彼の葬儀に参列出来なかつたことが返すも遺憾である。終生の恨事である。

私は一晩考へた揚句、直ちに四回へ渡つて彼の遺族の方々を訪ねてゐる。彼の遺族の様子をばさばかに訊ね、彼の新しい墓前に氣高い花を供へることが敢にどうせめても心やりであると思つた。また彼の天才を育くみ、彼の文学を生んだ瀬戸内海の自然の風物、人情に親しく接するべくとがどんなに私にとつて懇めとなるであらうとも考へた。

そして翌晩、私は井上、真杉、能勢、永山、大島の諸君に思ひを述べた。つとより東京を出発しなかつた。いま私は、この文章を大阪から高松へ渡る船の中で綴つてゐるのである。私は何を書いたのだらう。解らない。

私はいま甲板へ出た。風を吸つて来た。午前四時頃だ。さうさうか。重島のあたりに記帳が書つて、上弦の月色の月が蒼蒼かかつてゐる。あたりは真暗で、船が大きいうねりに乗り、海は蒼のやうな平を並べてゐる。これらの風物は、河田よ、早くも彼情の追憶のやうに私に重つて迫

り、暗窓は私の胸に立ち昇る。さういへば君の「海豚の花」といふ小説の中に、「海豚は海の牙だ」といふ一句があつたね。何といふ天才的な、美しい文句だらう。

私の船は、その海の牙を蹴破つて、君といふ天才を生み、またその臨終の地となつた土地へ突進してゐるのだ。併し私は、もう半月早く来たかつた。(二月九日夜、鳴戸丸にて)

2

二月十日、土曜日

午前五時二十分、船は高松棧橋に着く。

まだ真暗だ。高松市は君の臨終の地である。闇と静寂の中を歩いて高松駅に行く。

六時、高松発の松山行列車に乗り込む。君の小説に出て来る白衣の巡礼達も乗り込む。夜が次第に明け初めて、談岐の山々がクツキリと姿を現はして来る。実にいい天気らしい。

七時三十五分に観音寺という駅に降りる。夜明の風が冷めたい。夕勢の中学生や女学生と一緒に、田舎道を町の方へ行く。君もこの中学生(香川県立三豊中学校)であつたのだ。町の郵便局へ行つて、高松で出せないで、ここまで持つて来た、昨夜大阪からの鳴戸丸の中で君の思ひ出を綴つた短い文章を、書留にして「今日の文学」の加宮氏へ、掲載依頼状と一緒に送る。

君の町の仁尾と観音寺とを連絡するバスの停留所を訊ねて行つて見れば、そこはうどん屋であつた。聞けば、いまのまき一台行つたばかりだから後は十一時まで待たねばならないとのこと。

仕方がないので、中へ這入つて待つ。自動車を待つ間、出入りする客の多くが、話し具合、表情のみならず口つきから顔のあたりの小じんまりしたところ、頬の締つた線、などが逆も君に似ているのを発見する。この地方のタイプかも知れない。

十一時、乗合バスに乗ると、すぐ左手に海が展げて来た。僕は最初から観音寺といふ町全体の不思議な明るみに疑問を感じてゐたが、こんなに海が近くては、とはじめて了解が行つた。

車体は断崖の上を走る。碧空の下、右手は赤土の山また山。青いギラギラした海が左の眼下に迫り、揺れてゐる。この山道を、君は自転車のペダルを踏んで、五年間中学に通つた。この道の風景は乾度、君の「印度ブレハの夏」といふ小説の書き出しの部分であらう。実に明るく、また峻絶な道だ。

約三十分、漸くバスは仁尾の町へ入る。山懐ろの傾斜面にかたまつた軒の低い瓦屋根の並んだ、シンとした静かな町。僕が、君の名をいふと、運転手はわざわざ君の家の前の道まで車体を乗り入れてくれた。

君の家は一寸した雑貨店であつた。僕が店へ這入つて行くと、東京で一度逢つたことのある君によく似た君の弟さんの徳一さんと、清子さんが出て来て、僕を店に隣あつた部屋へ上げた。線香臭い匂ひが鼻を襲つた。僕は黙つてまじろオオ、バアを脱ぎ、仏壇の前へ坐ると線香に火をつけ、君の位牌へ捧げ、リンを鳴らした。僕は拝みながら、そこに君がすでに僅か高き一尺位ひの壁の中に書きなつて這入つてゐるのを素直く目撃した。一分間ほど、僕は手を合せてゐた。戒名は「泰徳一さん」と清子さんにつれられて、中等時代スツと君の書斎であつた離れへ行つた。

昔の家で採光の具合が調和がとれず仄暗い、併し何となく落着いた部屋である。君の机や、本箱も窓のところにあつた。本箱の上には、君よりも五年前になくなつた兄さんの愛玩したヴァイオリンが埃にまみれて立てかけてあつた。暫らくすると、君のお母さんが年末(旧暦)で忙しいお店の方から、手を抜いてゐらう。僕は悲しみの底にある君の母上に対してどう挨拶してよいか解らなかつた。夢中で二、三度頭を下げた。君のお母さんは早く君のお父さんに死に別れてから、君達三人の兄弟の養育のために、生涯を独身でやつて来られたと以前から君に聞いてゐた。併しその人はすでに最年長者の愛児を失ひ、いままた君を失つたのである。僕はお顔を見るのがつらかつた。けれど、君のお母さんは案外しつかりとして、悲しみを俄かには表に出さない人らしい。その意如何にも心の苦悶を殆ど語らなかつた君のお母さんだと感じられた。

お母さん、弟さん、それから清子さん、誰方も東京から四国までやつて来た僕へ実に心から感謝して下さつた。それがギリギリない言葉や仕草の端々にまで漏はれて、僕としても裏に涙の出っほど嬉しなかつた。

御馳走を戴きながら、僕は最後まで君の看護に當つた清子さんの口から、君の病状の変遷から、臨終までの様子をつぶさに聴いた。

一月三日、高松赤十字病院で最初の咯血が襲ふまで君はハツキリと自分の病気が解らなかつたらしいね。それまでは近親の人もそれを君に告げず、君自身もまさかと思つてゐたのだらう。君が病院で書き、遂に出さないうでしまつた僕への手紙の一端に「それはその改訂の道して行つたものを整理してゐる時に出て来たのだが」「僕は田舎へ来て風邪をひき、たゞ高い熱で苦しんだ海句、急性の肋膜炎と言はれた時以來、人間の体なんて突然に不思議だと思ひ初めた。重い荷をかつぐ体と、一寸の風邪にも障る体とは、そんなに變つてはゐないのに。だが僕はやがてこの病気に勝つたらう。そしてこれからははじめて病気に關心をもつたらう。」「それからその前の方に」「君は四十日許り、夏はたつてつひ一時半毎年の湿度と夜はヒキホスで書きなすつた。ついでに間きでの七十本位のカンフル注射、そして今は大きい静脈注射で、退屈な、碧い空に鳥の啼く音が続く。大きい病院の隔離された一隅のしづかな病舎である。併しした腹膜炎も癒えなくなり、肋膜炎は経過甚だ良好、この調子でゆけばもう十日位で退院出来るのではないかと入思はれるよだ。」「こんな一節をへあひのさあひ。



死に至る病いの中で書いた母への手紙

河田誠一その後の生活史の方であるが、資料の中に、昭和七年十一月二日付の、母ますの宛の中野区江古田からの河田の書簡が残っている。

「お変わりありませんか。この間は着物や二重廻しやいろいろのものをいただいたて有難うございました」と書き始めて、便箋四枚に亘っている。「清子のことです、人の口は人の口です。僕は決して母上を苦しめるやうな事を致しては居りません。母上を欺くやうな事はして居ないので」と、清子との同棲の事実をぼかしている。(自分のことは)「新潮社の文芸日記の終りの方に『東京派』といふ雑誌の名がのつてゐます。その編輯者名は僕の名になつてゐます。いつのことははしませんが、僕の遠い将来の成功でも、万一あるとすれば、それを楽しみにして待つてゐて下さい。」そして最後は金を無心する文章となつてしまふ。文学で食へるなど至難のわざの時代であつた。窮迫すると、息子の頼る先は母親しかなかつた。

昭和八年春の手紙。「いままでかくしてゐて済まなかつたが、自分はずっと清子と暮してゐた。今度決心して別れることになり、新しい第一歩を踏み出す考えです」と書く。三年間の暮しと別れるに至つた経緯がめんめんと記されている。

「清子はただ僕だけの愛情で生きてゐたのであります。ところが御存じの通り、僕の仕事は昼間寝て、夜は仕事をし、しよつちゆう外へ出るので、普通の人のやうに、女に対して親切を出来るものでもなし、愛情はむしろ僕が清子にうけてゐたやうなものなのです。／＼そこへやさしい言葉をかけてくれる男が居れば、そしてその男が祖母を養つてやる(いつたかどうかしりませんが)とでも言へば、とびつのは、清子のやうなどちらかと言へば浮気な、そして正直一点張りの、絶えず愛情のある生活でなければ続かぬ女には当然です。要するに、簡単にいへば清子が浮気だ

(後略)

◇近代詩

本町近代詩壇において特記しなければならぬのは河田誠一の存在である。昭和九年二十四才の若さで他界したがまことに前途をしく望まれていただけに残念なことである。中学校時代から詩を書き、昭和四年上京して早稲田第二高等学院に入り、田村泰次郎、井上友一郎などと同人雑誌「桜」を刊行して小説を発表した。詩を作ったのは二十才頃までで、小説家として生涯を立てようと決心したから小説家の中に入れて考えてもよいのであるが、かれの小説には多分に詩的要素がある。やはり詩人だ。彼の小説は当時の文芸雑誌「桜」以外に「東京派」「今日の文学」「新科学的」その他多くに掲載されている。非常に象徴的であり官能的である。

井上友一郎氏の言葉をかりて詩人河田を評してみると

「私は子供の時から色々な友人はいたけれども、河田と私との交遊は単に親しく交つていたという以上に、生涯の仕事を通じての友達だった。つまり私から云わせると河田と深く交れば交る程それだけ仕事の上で勉強になるという風な具合であつた。いい友達とはいつの場合でもこれだと思ふ。これでなければうそだと思ふ。」

私にとつては、そういう値打のある友達を失うことが世の常の無常感とは一応別に、どんな大きな損失であつたかは、おそらく他人にはよく分るまい。私の悲しみというものが、いつまでたつても深く且つ新しいのはそういう気持から来ると思ふ。

けれども河田との交遊の何年間かは、私自身の生涯にはまことに美しい記憶である。有難過ぎる記憶である。そればかりで存在した事実であり、そして私自身の生涯の記憶の中に消えることなく生きている事実である。私はこの事実を限りなく愛したい。河田が美しい心を持った詩人だつたということはもう私はここに書くまい。……」

右は田村、井上氏等によつて出版された「河田誠一詩集」の後記の文である。所載二十二篇中左に二篇を記す。彼の情熱と詩人としての苦惱をくみ取ることができる。

燃ゆる村落

放浪詩篇その一

人間がアミーバであつた時以来

鴉が「鳥」であつた時以来

炎天はいまもかほりあらざりしならん。

われ一日太陽の寂寥になきやまざりしことのありたれば

月蝕の臭き春は暮れたり。

国境にひくく雨の山脈を俯瞰しつ

自動車は骨のごとき人間をりせて下りぬ。

されど、わがごとき心重き足どりぞ。

夏はやく鶯の彼岸をはさみて憩へば

ああ苦行の溪谷のそこふかき花の群落の碧潭のまひるをおおいたり。

火の花よ。

美しく素朴なる少女は裸体となりて水浴みせり。

そは何の花かしらねども。

わがゆけば、いまはいづこも燃ゆる村落に見ゆ。

わが恋にやぶれて、うらぶれし白日夢とも見よ。

犬のごとき女ぞ、わが朝夕に欠きたれば

われは孤独となりぬ。

### 悲惨の港

朝、水煙をのこして去る。船の纜をあげて地獄の鬼をのせ  
ヒマラヤの白雪を積み、悲惨の港を出づ。

こは、傷つきし者のみ、闇いの火焰に髪焼けし者のみ。

われの歎ばしむるところ。われのかなしむるところ。

みなとほく洋上にありて、一雨にぬれしパン腐れし牛乳は、

水路三日にして下船せし地獄の鬼にのこせむとせしなり

悲惨のみなとに行け。

春ふけし夜をこめてゆけ。

街々の酒は苦く、船宿の女は美しからず。

されど、赤黒き愛慾の

つめたく重い花のいのちになかむ。

哭くは人にあらざりき。

燃ゆるは犬にあらざりき。

かくて犬のごとき人のみゆけ、悲惨の港。

うるはしくかなしき悲惨の港。

われ、かの港にて犯せし殺人の罪科の追放にあまんじ、

いまより後、苦惱をしほる牛を飼はむとし、大陸の砂漠にゆかむとす。

詩の意味、内容はとにかく、感受性の強い彼が精神内奥の苦痛を刺戟強烈な  
言葉でよく象徴表現している。

紅院 小

一 ちり 肆 節 の 十 二 曲 流 行 曲  
4 番 階 9 曲 の 十 二 曲

田舎のあせとし 隠山をゆく

紅院の落は 風が吹くよ。

此の平なちのあつとよ

お島のあつとよ ともになくよ

ともになくよ ~~お島のあつとよ~~

お島のあつとよ 山にこるよ

お島のあつとよ おのちのあつとよ

お島のあつとよ おのちのあつとよ

お島のあつとよ おのちのあつとよ

お島のあつとよ おのちのあつとよ

のりい境田 雨降り

平中 橋 滝 ぬれり

赤い 晴 曇 好 足 踏 り

左 かの 山 かく 見 てる 花 びら

陸 につ いた 天 神 様 へ

原 ~~山~~ 島 田 の け ち 山 中 へ

山 へ たい じ かの ち ち ち

う いた る の 物 かつ ぎ め

尾 は よい 町 他 国 の ち ち

~~山~~ 坂 の ち ち

水 下 ち ち ち ち ち

昭和二年（三十三年生）新年の日記

いと大きな思ひのみにぞ持つねに心をなましむ十七の夜。

四 方 拜

一月一日（土曜） 大時起床、空曇る天、雨模様、小雨

昨年大晦日。夜、毛崎は蒼蒼の多情を恨を讀ませられたので、今朝は

すつかり腹防もしちやうた。尾三日の朝は暗くそよよの風もあひ。

たゞ冷い先合がせしと龍夜つて午か妙下と帰る。二十五日大行天皇

山崩御。二十日迄喪章をまつがる。否、それは老練か。諒廟中だ。

とあ今年から一生嚴命とやらうと新年の通り決心するが、今朝の決

心は例年と少し違ふから頼むし。頼むし。たゞそれと夫の命だ。

諒廟上園を詔祀式年、そればかりおつてこうまを、静かにおしつたらう。

マントをひめぬて小呂の校へ行く。原儀は書も夕方帰リ又腕にかい

こおそくか（？）りある。昨年の今日もおもふも悲しい。今日は兄貴

が臥床中も重荷だつたのだ。その時もおもふとぞつとする。

とたかく何故ともいれぬ悲しみの正月だ。十五は飾りは止した。

寂れたる指・たふれたるつめたるの窓・柑の味も暮冬の夜よし。

一月二日(日) 晴

小さな昔年の風・ゆらぐ音・たゞそれのみがこゝの朝は耳に傳はる。

「お母ちゃん・ぬまー」として。「幼時・お母人の面影をしのびのも懐かしさはと

冥心つきたり。今日の陽は赤美し事限りあり。風はなく秋年植け

たバベの大樹のたけもあましく秋咲かひかた庭の木犀の黄色い光線

まうけてぬる。夜はよく晴れぬる。

幻東たよつて押川の宿へオロロを刷り行かぬはなうかつた。「オロロ!

私はたゞる月を本日は見せし増したるを恋しむ。その月には可なり

もてぬるとまふ言ふ事をもおぼえり。今代えんから南かき。少からず昔任

の重さと感じた自分かかると自身ひたひたい気もする。

今年つる月には不景気だ。それト實際自分りの成儀はか不景気だ。

人トはあれをやうやうあるやうだ。夜はあつて観音寺と出。提灯で観音堂

へとあめらぬ。その山にやうく寺社の二層の山段をやうく帰らうとも

河のべい。全身にあつて。夜の涼上冷やえし心地が甚お事なり。

## 追憶

三中昭和4年卒業(密蔵身) 押川俊夫

(日本国際貿易促進協会相談役)

その頃野球仲間の仁尾出身の塩田了が、同郷の河田誠一を紹介してくれた。

河田は二年生の頃から詩歌が巧みで、時々私に自信のものを見せたり、文学談義をした。私も比較的読書好きだったので話が合い、深く交わるようになった。

彼は東京の「明星」という雑誌に投稿してそれがよく入選して、私はその作品を見せてもらった。選者はその頃売出中の新進の西条八十であった。なかなか私の及ぶ処でなかった。

河田は手紙を西条八十に出して、その返事をもらい、私に見せてくれたことがあった。やがて河田と共通の友人松方も仲間に入れて同人雑誌を出すことになる。誌名は私の発案で「オーロラ」。

私は幼い頃、芝居好きの母に連れられて松井須磨子のトルストイの「復活」、カチューシャが舞台で唄う

行こうか、戻るか、オーロラの下を

ロシヤ北国、涯知らず：

の唄が好きであった。母を早く亡くして母恋いの唄であ

ったかもしれない。私は河田達にこの唄を唄って聞かせたものである。

父の顔でガリ版一式を借りて、私の室の四畳半が編集室三人のいろいろの作品を集めて発刊することになる。夜おそくまでガリ版切りをして三人でしたことを覚えてい。しかし、何分にも学校の合間の仕事である。三人の意気込はあったが、二号で休刊の運命となる。

五年生になって、今度は河田が「オーロラ」の後刊を言い出して、彼は四国を代表する同人雑誌にするため「四國文學」と名付けた。友人達の作品を多く集めて、以前よりやや堂々たるものが発刊された。

河田誠一のこの時の意気込みを思うと、彼は生涯の仕事として文学、特に詩人を志したのであろう。

昭和四年四月、彼は西条八十を慕って、早稲田大学に入学。学生仲間の文学グループに加わり、念願の生活を始めた。井上友一郎、田村泰次郎、石川利光等と同人誌「東京派」を創刊し、時折その消息を知らせてくれた。

久しぶりに逢う彼は意気軒昂。彼はその仲間でも一目置かれていた。当時中野を中心に中央線沿線は文学青年たちの巣になっていた。よく私も誘われて中野駅の東側にあったホームラン食堂で氣勢をあげたものである。

彼は着々と自己の世界を構築し、同人誌に数々の作品を書き本格的作家修業を進めていた。彼らの仲間は昭和八年になって当時の文学活動の主流であった横光利一、林房雄、龍膽寺雄等に対して抵抗して新しいグループを結成して「櫻」を発刊する。

昭和八年の春だった。当時有楽町にあった朝日新聞社の講堂で彼らの演説会が開かれる。彼らは壇上に交互に上り、氣勢を上げて既成の文壇を激しく攻撃した。

河田に注目した。彼は演壇に立つと、コップの水を一杯呑み、片手を上げて大声で一声叫んだ。

「横光利一！何するものぞ。さらばぢゃ！」

再び片手を高く揚げて悠々と壇を下っていった。

氣勢のよい出だしであったが、「櫻」は秋になって廃刊される。

河田の最も生き生きとした時代であった。

この二年ほど前だった。彼は若い女性を一人連れて私の処にやってきた。薄々聞いていた、彼の家に孤児と成って同居していた親類の清子という女性。恋仲になった彼を追って上京、同居したのである。これを知った母は反対し、彼への送金を止めてしまった。彼女は働いたが、不況時代で収入も思うようにゆかない。同窓の報知

新聞にいる塩田了は彼の原稿の売り先に協力していた。童話や雑文を書いていたが、生活の資には不足である。苦しくなると時々やってきたが、私には力がない。だが三人逢えば結構楽しかった。

江古田の自由の中の六畳と三畳二間の彼の家を訪れてみた。

机上には一本のローソクがゆれていた。(電灯は切らしていたのである)その光で端然と机に面して原稿用紙をひろげている河田誠一の姿に私は打たれた。

「おい、友あり、遠方より来たるだ、飯だ、飯だ」

清子は困った顔をして、傍のおひつの蓋を取って見せた。空っぽだ。

その夜、私は有金をはたいて牛肉で大宴会だ。酒も入って一組の蒲団に三人で寝たことを覚えていて、身を引こ

やがて清子は彼の周辺の悪化に耐えかねて、身を引こうと家を出た。彼は必死に探した。私もいっしょに探した。三ヶ月ほどで彼女は心配で帰ってきた。それ以来二人で私の処へもよくやって来た。彼らの生活に私は心を痛めた。その年、秋も深くなり彼らは誰にも告げず、東京を去っていった。二人に対し手を貸すことの出来なかった悲痛な想いは長く心に残った。



# 歩散の文学山賛

佐々木正夫



毎日新聞社編

多度津

俊



# 友一郎、泰次郎らと「桜」刊行

「孝行もんでした」と仁尾の老母

予讃線詫間駅で下車、そこから仁尾の町までは、さらにバスで二十分かかる。昭和初期には、このバスコースがなく、観音寺と仁尾を結んでいるだけだった。若き日の作家、田村泰次郎は、観音寺から仁尾行のバスに乗った。それも七時三十分発のバスに乗りおかれて、十一時三十分発まで待たされるといふ仁尾行だった。昭和九年二月十日のことである。

『漸くバスは仁尾の町へ入る。山懐ろの傾斜面にかたまった軒の低い瓦屋根の並んだシンと静かな町。僕が、君の家の名をいふと、運転手はわざわざ君の家の前の道まで車体を乗り入れてくれた。君の家は一寸した雑貨店であった。僕が店へ這入って行くと、東京で一度逢ったことのある君によく似た君の弟さんの徳一さんと、清子さんとが出て来て、僕を店に隣った部屋へ上げた。線香の臭ひが僕の鼻を襲った』

余文芸雑誌・桜・昭和九年四月刊から

田村は一週間前の二月三日なくなつた親友河田の靈にぬかずくため、はるばる讃岐を訪ねたのであった。

河田誠一―讃岐の、文学に関心を持っているものの間でも、あまり知られていないが、将来を期待された作家だった。明治四十四年十一月二十三日、三豊郡仁尾町中津賀で生まれた。生きていると、ことし五十八歳になる。父武治（四十六歳で没）と母マスの長男。仁尾小学校、県立三豊中学校（観音寺一高）を卒業して、昭和



仁尾町にある誠一の墓標と母堂マスノさん

四年、第二早稲田高等学院文科に入学、翌年中退。昭和八年の夏、結核をわずらい、翌九年なくなった。二十三歳という若さだった。

誠一は、二十歳ごろまで詩をつくり、その後は、同人雑誌「東京派」「今日の文学」「青猫」の同人を経て、昭和八年に創刊した「桜」などで活躍した。没後、草野心平装幀で「河田誠一詩集」が昭森社から刊行されているが、同人雑誌や新聞に発表した小説、評論、小品は二十六編。この題名に使った小説「新城榛名の手記」は遺稿で、未完成の長編「山

雀」の部分である。五百枚に近いそうだが、中ほど五十枚だけしか活字になっていない。

初夏のある日、わたしは、仁尾町の誠一の生家を訪ねた。ありがたいことには、ことし八十六歳になる誠一の母堂マスノさんはお元気だった。

「誠一も弟の徳一（昭和十八年没）も孝行もんでした。口返事一つするでなし、ええ子でした」

子供がいなくなったマスノさんは、夫婦養子に雑貨店をまかせて、余世を楽しんでいる。地元の四国作家同人、中井敬子さんは「娘のころ、この店へ日本髪の手紙を買いに来ました。お母さんがいないときは、誠一さんが何でもそろえてくれ、なかなか感じのいい方でした」という。マスノさんに案内されて、中井さんたちと誠一の墓に詣った。

「井上友一郎さんや田村泰次郎さんから、ときどき手紙をくれます。友だちが有名な文士になっていることを聞くと、誠一がふびんでなりません」

息子の墓を見あげながら、マスノさんは涙ぐむ。一冊の詩集と数冊の同人雑誌しか残さなかった河田誠一。不遇といえ、それまでだが、讃岐にとっても惜しい作家をなくしたものだと思う。同人雑誌「桜」では、ありし日の誠一をしのいで、遺稿や友人たちの思い出をつづった追悼号を出している。

井上友一郎河田の死は単に人間の死としか写らない。だが、河田は今度、彼だけが、完全に生きた筈であった。私はそれを爛々と凝視しなくてはならぬ。

坂口安吾河田には人間の底に光があった。そして逞しい気骨があった。だから、あの男はどん底の中にいても、決して身辺に湿気というものを持たなかった。

中河与一僕は河田君の作品で「海薔薇」という小説をよみ何かの不可解な高揚された詩情、南方の光線にみちたものを感じたのを覚えている。僕は、同郷の先輩として、何の尽くすところもなく、河田君のような天才のある少年を早世せしめた何物かに無限の不平を感じている。

そのほか、追悼号には、真杉静枝、沖和一、北原武夫らが思い出の記を寄せている。

なかでも、田村泰次郎、井上友一郎とは、いちばん仲がよかつたらしく、仁尾にはたくさんの手紙やハガキが残っている。

『河田、俺たちは断然、来月十日締切り、来月末発行の決心をした。君が上京したら、みんな雑居するんだと力んでいる。とにかく、忙しくなった。印刷屋のこと、費用のこと、広告のこと、売捌店のこと等々。これから眼が回りそうだ』

△昭和八年・田村泰次郎のハガキ▽

いつもは手紙を書いてよこした泰次郎も、同人雑誌「東京派」創刊の前後は、走り書きのハガキばかりである。

ところで、誠一は帰郷してから、高松市の日赤病院第十一病舎で療養していたが、なくなる数日まえは、市内塩上町の仮住まいに帰っていた。医者的好意であった。清子夫人は、誠一の死後上京して、東北出身の三カ尻という人と再婚したが三十六歳で死んでいる。

昨年、マスノさん宛の井上友一郎の手紙では『誠一君がなくなられました三十年の年月が経ちましたが、誠一君のこと、一生忘れることができません。原稿は大切に保管し、機会がありましたら、世の中へ出したいと心がけております』と、励ましている。近く「四国作家」第八号が刊行されるが、井上、田村、中村猛の思い出の記を入れ「河田誠一特集」を企画している。